

Motomura mizohazama

本村・溝狭間遺跡第6次調査

福岡県八女市本村所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第137集

2022

八女市教育委員会

Motomura mizohazama

本村・溝狭間遺跡第6次調査

福岡県八女市本村所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第137集

2022

八女市教育委員会

序

八女市では近年、毎年のように開発に伴う遺跡の発掘調査がなされています。特に、令和2年度は開発に伴う発掘調査件数が10件以上あり、通常の3倍以上発生しました。そのうちの1つが今回報告する本村・溝狭間遺跡の調査です。

本報告書は、建売住宅建設に伴い令和2年度に実施した、八女市本村字溝狭間に所在する本村・溝狭間遺跡第6次調査に関し、発掘調査で得られた成果の報告です。

本村・溝狭間第6次調査の発掘調査では限られた調査範囲でしたが、中世の集落の一部を調査し、溝跡や土坑等が発見されました。このことから、中世の八女市の人々が生活していた当時の村の存在が伺えます。今後、周囲の調査成果を足し合わせることで、当時の集落についてより詳しく判明することが期待されます。

その他、八女市域ではこれまでに多くの遺跡の発掘調査がなされており、今後も順次、成果を発掘調査報告書として刊行する予定です。このたび発掘調査報告書を刊行するにあたり、本書が学術的資料として活用されるのはもちろんのこと、文化財の保護や理解普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりタマホーム株式会社には、ご協力いただきましたことを厚くお礼申し上げます。また、調査に際しては地元の方々、並びにご指導・ご助言いただきました方々に心より感謝の意を申し上げます。

併せて、今後も八女市の埋蔵文化財行政にご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

令和4年3月31日

八女市教育委員会

教育長 橋本 吉史

例言

- ・本書は八女市がタマホーム株式会社の依頼を受けて実施した、建売住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。本報告では令和2年度に実施した、八女市本村所在の本村・溝狭間遺跡第6次調査について報告する。
- ・本報告の発掘調査は八女市教育委員会が実施し、文化振興課職員の補助を受け、甲斐郁が現地作業を担当した。
- ・本書の遺構実測図で使用する方位は座標北を基準とする。
- ・本書で使用した遺構実測図は現地調査実施時に、発掘担当者の指揮のもと発掘調査参加者で作成した。
- ・本書掲載の遺物実測図の作成、遺構実測図および遺物実測図の製図は、令和3年度に八女市文化財整理室において、担当者の指示のもと整理事業員が実施した。
- ・本書掲載の写真は、遺構写真、遺物写真ともに甲斐が撮影した。遺構写真のうち空中写真については有限会社空中写真企画に業務委託した。
- ・本書の編集は八女市文化振興課職員の助言のもと甲斐が行った。
- ・本書執筆に際しては、福岡県教育委員会文化財保護課大庭孝夫氏のご指導・ご協力を得た。
- ・発掘調査時の現場図面・写真・製図等の記録類および出土遺物等は八女市教育委員会にて保管している。

本文目次

1. 調査の経過	1
(1) 調査に至る経緯と経過	1
(2) 調査体制	2
2. 遺跡の位置と環境	3
3. 調査の概要と成果	5
(1) 調査の概要	5
(2) 出土遺構と遺物	8
(3) 総括	15

挿図目次

第1図 本村・溝狭間遺跡6次調査位置図 (S = 1/1, 250, 000)
第2図 本村・溝狭間遺跡6次調査周辺遺跡図 (S = 1/6, 000)
第3図 本村・溝狭間遺跡6次調査SD01実測図 (S = 1/120)
第4図 本村・溝狭間遺跡6次調査遺構配置図 (S = 1/200)
第5図 本村・溝狭間遺跡6次調査SD01出土遺物実測図 (S = 1/4)
第6図 本村・溝狭間遺跡6次調査SD02実測図・SD03断面図・SD04断面図 (S = 1/120)
第7図 本村・溝狭間遺跡6次調査SD02出土遺物実測図 (S = 1/4)
第8図 本村・溝狭間遺跡6次調査2区SK01実測図 (S = 1/50)
第9図 本村・溝狭間遺跡6次調査3区SK01実測図 (S = 1/50)
第10図 本村・溝狭間遺跡6次調査3区SK02実測図 (S = 1/50)
第11図 本村・溝狭間遺跡6次調査9区SK01実測図 (S = 1/50)
第12図 本村・溝狭間遺跡6次調査9区SK02実測図 (S = 1/50)
第13図 本村・溝狭間遺跡6次調査その他出土遺物実測図 (S = 1/4)

表目次

第1表 本村・溝狭間遺跡6次調査出土遺物観察表

図版目次

図版1 本村・溝狭間遺跡6次調査遺構写真1
図版2 本村・溝狭間遺跡6次調査遺構写真2
図版3 本村・溝狭間遺跡6次調査遺構写真3・出土遺物写真1
図版4 本村・溝狭間遺跡6次調査出土遺物写真2
図版5 本村・溝狭間遺跡6次調査出土遺物写真3

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯と経過

本村・溝狭間遺跡第6次調査地点は、八女市本村字溝狭間 600 番地 11・12、601 番地 8・13・14・16・17・18・19 に位置する。調査地点が所在する宅地では、宅地造成の計画が予定された際に、埋蔵文化財の有無の確認のため試掘・確認調査を実施している。その結果、ほぼ全域で遺構と遺物が確認されたため、平成 31 年度に域内道路部分について、本村・溝狭間遺跡第 1 次調査として現地調査を行い、溝状遺構等が発見されている（報告書近日刊行予定）。その後、令和 2 年度には、宅地内の個人住宅建設に伴い数ヶ所で発掘調査が行われている（本村・溝狭間遺跡第 2～5 次調査・別冊報告）。

今回の調査に至る契機は、タマホーム株式会社による 9 棟の建売住宅建設が計画されたことである。令和 2 年 8 月 17 日に文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出があり、遺跡への影響の検討を行った。

これまでの調査成果から、今回の建売住宅建設箇所に埋蔵文化財があることが明らかであり、杭工事を伴うことから遺跡の現地保存が困難であった。このため、八女市教育委員会から福岡県教育委員会に発掘調査が必要と思われる旨意見具申し、県教育委員会より発掘調査の指示があった。その旨文書で事業者へ通知し、事業者と協議の上で工事掘削がなされる箇所を対象に発掘調査による記録保存を実施することとなった。

タマホーム株式会社と八女市で発掘調査の覚書・協定書を締結し、住宅建設予定地の約 500 m²の現地発掘作業を実施する運びとなった。

八女市教育委員会では、令和 3 年 1 月 6 日から 3 月 12 日にかけて現地作業を実施した。調査では重機による表土除去後、人力で遺構検出・掘削を行い、遺構実測図作成、出土遺物の取り上げ、現場写真撮影を行い、3 月 10 日に空中写真撮影を行った。

現地作業では各調査区画が狭小であるため、排土置き場に苦心した。区画によっては 1 度で掘削が完了できず反転掘削を行った箇所もある。調査が完了した区画から事業者へ引き渡し、住宅建設工事に着手していくため、調査期間終盤では駐車スペースの確保のため、宅地を管理する不動産業者や調査地近隣の店舗の協力を得た。また、仮設トイレの置き場もなくなった際には、タマホーム株式会社が設置した見学者用トイレを借りた。調査期間中は降雪する日は寒さの中で作業を行った。常に湧水する区画では毎日の排水に苦勞した。今回の現地作業と同時に複数の現場対応をするため、文化振興課職員に動員をかけ、補助を受けて調査を担当した。

出土遺物は整理箱 2 箱分であり、令和 3 年 3 月 16 日に八女警察署に発見届および福岡県教育委員会に保管証を提出した。

整理作業は令和 3 年度に実施し、出土遺物の洗浄・注記・復元・作図および調査時の図面・写真記録の整理を行い、報告書を作成した。

(2) 調査体制

本報告に掲載する遺跡発掘調査時の調査体制は以下の通りである。

【令和2年度】（現地調査時）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長		橋本 吉史
教育部長		原 信也
文化振興課	課長	久間 政幸
同	課長補佐兼文化係主任	深町 明夫（総括）
同	参事補佐兼文化係長	高山 康博
同	係 員	高口 愛（事務担当）
同	係 員	檀 佳克
同	係 員	甲斐 郁（調査担当）

【令和3年度】（本報告刊行時）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長		橋本 吉史
教育部長		原 信也
文化振興課	課長	鞆木 英希
同	課長補佐兼文化振興係長	森田 尚美
同	参事補佐兼文化財係長	
	兼歴史文化交流館係長	片山 あづさ（総括・事務担当）
同	係 員	檀 佳克
同	係 員	甲斐 郁（整理・報告担当）
同	係 員	木原 堯
同	嘱 託	平 俊隆

2. 遺跡の位置と環境(第1図・第2図)

八女市は福岡県南部に位置し、南は熊本県、東は大分県と接する。

市域は矢部川水系の上流域から中流域に当たり、八女市西部では東西方向に延びる八女丘陵が旧八女市と八女郡広川町との境界になっている。この八女丘陵上には、国指定史跡の八女古墳群が築かれている。

今回報告する本村・溝狭間遺跡は、八女市街地北部の八女市本村字溝狭間に所在し、八女市役所の北側約850mに位置する。調査地の北側には八女丘陵があり、南側には山ノ井川が東西方向に流れている。

調査地が位置する宅地は旧水田面から約70cmの盛土造成が行われている。調査地の北側・西側は、調査地の旧水田面より約50cm低くなっている。このことから、調査地北側・西側の旧地形は低地であったと思われる。東側の現況地形は調査地と比べてわずかに高くなっており、調査地は東から延びる微高地上に位置していたと思われる。

なお、調査地と北側の八女丘陵の間には、美男川遺跡、島巡遺跡、下吉田地区条里が所在する。美男川遺跡では、古墳時代と中世に属すると思われる集落跡が発見されており、掘立柱建物跡や溝跡が見つっている。美男川遺跡の南に位置する島巡遺跡では溝跡が発見されており、弥生時代前期の土器片が出土している。どちらの遺跡でも「湿地状遺構」が検出されており、これらの遺跡は低湿地帯の中にある島状の微高地上に集落が作られたと思われる。古代ではこの地帯に条里が作られ、水田区画として平成6年時の地図には痕跡が残る。

調査地東側、調査地から北東約300mの地点では、過去の開発に伴う試掘・確認調査で青磁片が発見されている。その北側約180mの宅地では低地の堆積が確認されており、この青磁片出土地点付近が微高地の北端であったと思われる。

なお、調査地南東の住宅での試掘・確認調査では、5・6世紀に属する遺物が出土しており、山ノ井川を挟んで調査地の南側約250mでは古代の溝状遺構が発見されているほか、調査地の南側約300mでは令和3年度の本村・杉町遺跡第1次調査(別冊報告)の発掘調査で、河川の跡から縄文土器の破片が出土している。また、周辺の調査事例では南西に低湿地帯が広がることが確認されている。このことから、本村・杉町遺跡第1次調査地点は東から延びる微高地上の南部に位置すると思われる。

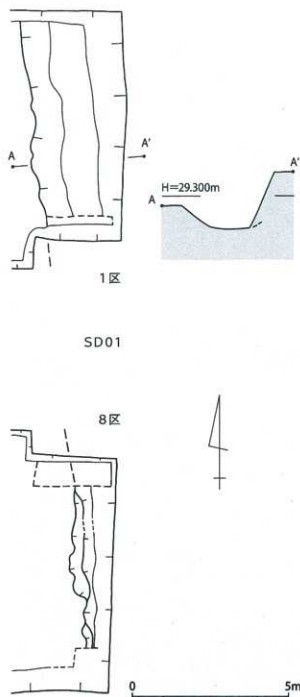
以上のことから、調査地は南北方向に約600mの微高地帯北西端に位置していたと思われる。調査地周辺の微高地上には、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の集落跡が存在していたと思われ、集落の中心は当該地より南東であった可能性が高い。



第1図 本村・溝狭間遺跡6次調査位置図
(S = 1/1,250,000)



第2図 本村・溝狭間遺跡6次調査周辺遺跡図 (S = 1/6,000)



第3図 本村・溝狭間遺跡6次調査 SD01 実測図
(S = 1/120)

3. 調査の概要と成果

(1) 調査の概要

建売住宅建設範囲の9区画のうち建物基礎の範囲を、それぞれ1～9区と設定して調査を実施した(第4図)。調査する区画の順序は事業者と協議して決定しており、中央の1～4区から着手し、次に北側の5・6区、最後に南側の7～9区の順に調査を行った。

表土除去は重機で行い、遺構検出・掘削は人力で行った。調査地の基本土層を示すと、地表下約100cmまでが宅地造成時の盛土層および旧水田層であり、その直下で黄褐色粘土層もしくは黄褐色砂泥じり粘土層がある。これらの層上面が遺構検出面である。その下位の地表下約130cmで砂礫層もしくはシルト質土層があり、湧水する箇所もあった。調査地北側の5区・6区では、地表下約110cm・130cmで砂礫層があり、その下位も砂層と礫層が互層になり厚く堆積する。5・6区で遺物の出土はなかった。調査地南西側の4・7区では、地表下約160cmでシルト質土層がある。4・7区からの遺物の出土は数点の土器細片以外はなかった。

遺構実測図作成時の基準点は、令和2年度の本村・溝狭間遺跡2～5次調査の際に設定した公共座標点を準用し、各区に杭を打った。

遺構の番号は、溝状遺構は区を超えている場合も同一の番号を付し、土坑とピットは区毎に番号を付与した。出土遺物の取り上げの際には、遺跡名・区名・出土遺構番号・年月日をラベルに記載し、区をまたぐ溝状遺構出土遺物は区毎に取り上げを行った。

現地調査では6区以外の調査区で遺構・遺物が発見されており、見つかった遺構は、溝状遺構、土坑、ピットである。出土した遺物は、土師器・須恵器・陶磁器・石器等があった。遺構と遺物の時期は、古代から中世にかけての時期に属すると思われる。

Y=-41,210 ²⁵⁰



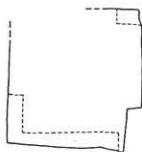
Y=-41,220 ²⁶⁰





Y=-41,230 ²⁷⁰

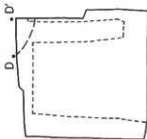
Y=-41,240 ²⁸⁰



6区

Y=-41,250 ²⁹⁰

SD04

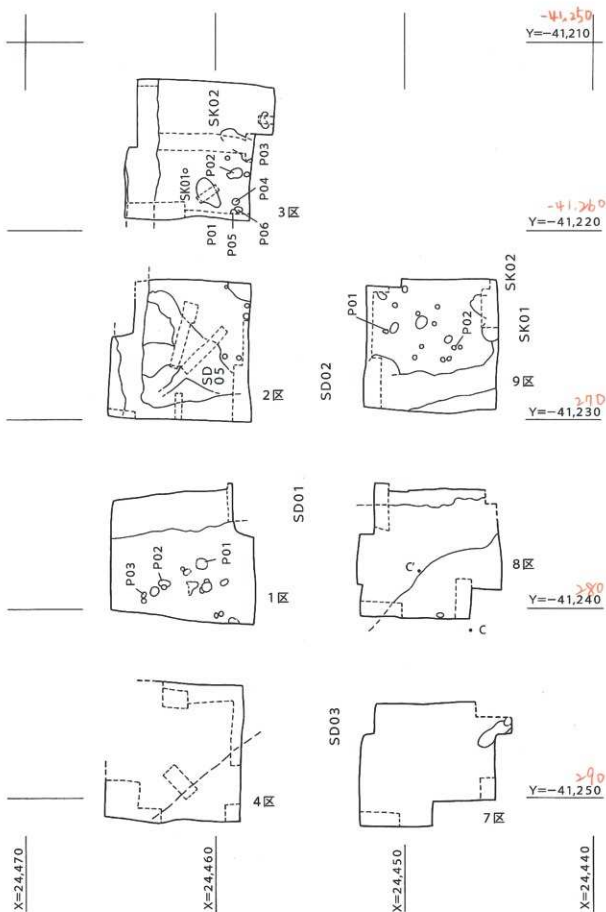


5区

X=24,490

X=24,480

X=24,470



第4図 本村・溝探坑遺跡6次調査遺構配置図 (S = 1/200)

(2) 出土遺構と出土遺物

以下、各遺構と遺物について説明する。

溝状遺構 (SD)

溝状遺構は5条発見された。SD01・02は人為的に掘られた溝跡で、SD03～05は自然流路である。

1号溝状遺構 (SD01) : (第3図・第5図)

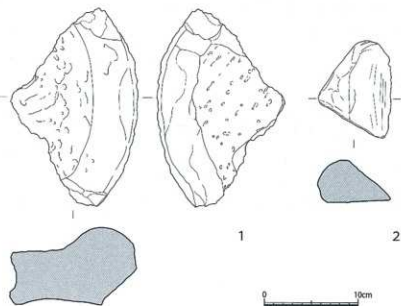
SD01は調査域南半部に位置し、1区と8区にまたがって存在する溝跡であり、SD02の西側に隣接する。南北方向に延びる溝跡で、南側・北側は調査区外に続いている。本村・溝狭間1次調査では北側道路部分で溝跡が発見されておらず、南側道路部分で南北方向に延びる溝跡が確認されている。SD01は北へ延びる途中で西側か東側へ曲がっていた可能性があり、南側で見つかっている溝跡と同一の可能性が高い。想定される形状から区画溝であった可能性がある。

長さは約20m以上である。東端が調査区外であるが、9区にはかからないため、幅は3～4.5mであると思われる。残存する深さは約70cmである。断面形状は逆蒲鉾形を呈しており、底面はやや平坦になる。石組等の護岸施設は確認されず、素掘りの溝であったと思われる。埋土は黄褐色粘土層の下層に褐灰色粘土層が堆積しており、径10cm程度の円礫が混じる。SD02の埋土と類似している。土層の観察結果から、もとは水路と思われる。

第5図に出土遺物を示す。1は表面の中央が窪みややや黒ずんでおり、裏面は浅く窪む。両面とも凹凸がつくが、裏面のほうがやや平滑である。石臼と思われる。2は断面が三角形に似た形状をしている。全体を方形に粗く加工した後で、斜めの面を作り出していると思われる。斜めになった面の下端に使用痕があり、ややへこむが上端は凹凸がある。この面の下端のみを使用したと思われる。砥石の可能性もある。

上記以外に、須恵器や土師器の図示できない細片が出土している。須恵器片は器形が不明で時期の特定は困難である。土師器片は鉢の破片である可能性があり、中世に属すると思われる。

時期が特定できる遺物が少なく、遺構の時期を判断するのは困難であるが、遺物の時期および埋土の観察結果から、SD01の時期は中世以降と思われ、SD02と同時期に存在した可能性が高い。



第5図 本村・溝狭間遺跡6次調査 SD01 出土遺物実測図
(S = 1/4)

2号溝状遺構 (SD02) : (第6図・第7図)

SD02は調査城南東に位置し、2・3・9区にまたがり存在する溝跡で、SD01の東側に隣接する。東側が開く「コ」の字形をしているが、もとは方形区画溝であった可能性が高い。2区の北側と9区の南側で東に向かってほぼ直角に曲がり、東端は調査区外へ延びる。本村・溝狭間第1次調査時に南側道路で発見された東へ延びる溝跡と同一の可能性はある。

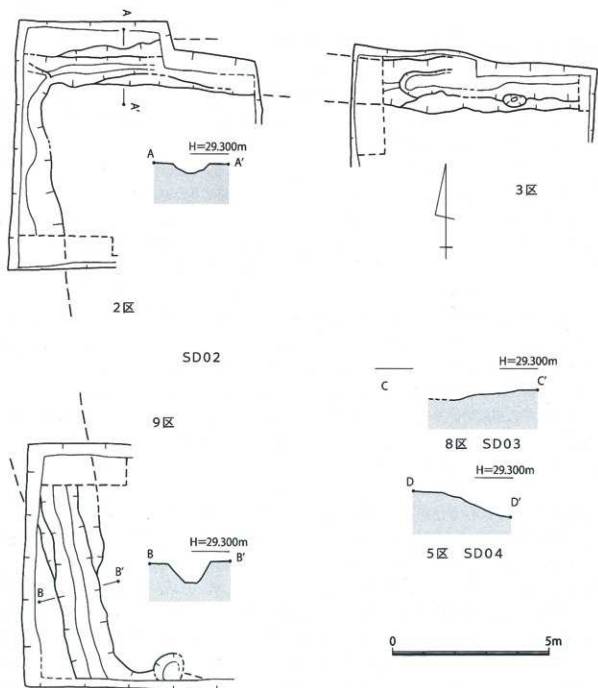
長さは東西方向に約18m以上、南北方向に約19.5mである。幅は約1.2～1.8mである。残存する深さは2・3区で約40cm、9区で約65cmである。断面形状は逆蒲鉾形を呈しているが、3区西端と9区北側では2段に掘られる箇所がある。底面はやや平坦になる。SD01と同様に護岸施設は確認されず、素掘りの溝であったと思われる。埋土は3区の一部で砂礫混じりの土層が堆積する以外は複数の粘土層が堆積しており、SD01の堆積と類似する。9区南側では、植物質が堆積した痕跡かと思われる黒褐色の薄い層がある。土層の観察結果から、もとは水路であった可能性がある。2区でSD05を切っており、9区南側で9区SK01・9区SK02に切られる。

第7図に出土遺物を示す。1・2は土師器で、1が坏、2が小皿である。1の坏は口縁部が直線的に広がり、端部に段を有する。口縁部は歪みが生じており、内外面が被熱で赤色化している。2は口縁部が欠損し立ち上がりの形状は不明であるが、底径が小さいことから小皿であると推測した。1・2はともに底部糸切りである。3・5・7は土師器である。3は鉢の口縁部小片で、器表面が摩耗している。5・7は鉢形の煮沸具である。5は口縁部片で、内面にハケ目を施す。図示はしていないが、他にも同じ器形の破片が出土しており、5と同様に内面のみにハケ目を施すものと、内外面にハケ目を施すもの、内外面にナデを施すものがある。7は胴部から底部にかけての小片で、内外面にナデを施す。4・6は瓦質土器の鉢である。4は口縁部小片で、口縁先端を平らにしている。6は胴部小片で、突帯がもう1条あった痕跡があり、もとは2条の突帯が巡っていたと思われる。突帯の下側に文様を施す。8・9は土師器の高坏である。8は坏部片で、脚部との接合の痕跡が残る。9は脚部片で、下部に向かってやや広がるが下端が残存しないため、もとの形状は不明である。どちらも器表面がやや摩耗している。10・11は須恵器の破片であり、甕の可能性はある。12～14は陶磁器である。12は白磁の口縁部片である。底部が残存しないが口径が小さいため、小皿である可能性が高い。体部外面の下端には釉がかからない。13・14は青磁の碗である。13は体部下半小片で、胎土は灰白色である。14は碗の底部で高台が付く。高台外面に稜を有する。内面見込みに花文を彫る。内外面に釉が掛かり、畳付にまで釉がかかるが、素地が露出する部分がある。胎土は灰色で少量の微細な白色粒がまじる。越州窯系青磁の可能性はある。

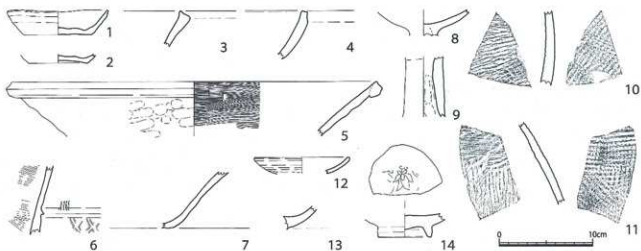
図示していないが、3区から表面・裏面の両面に煤が付着する石が出土している。直径約15cmのやや扁平な円礫である。

遺物の時期は、8・9の土師器の高坏、10・11の須恵器、14の青磁の碗が古代から中世に属し、それ以外のものは13～14世紀に属すると思われる。

出土遺物の時期は中世に属するものが多く、SD02は中世以降に存在していた可能性がある。



第6図 本村・溝狭間遺跡6次調査SD02実測図・SD03断面図・SD04断面図 ($S = 1/120$)



第7図 本村・溝狭間遺跡6次調査SD02出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

3号溝状遺構 (SD03) : (第4図・第6図)

SD03は調査区南西の4・7・8区にまたがり存在する流路である。北西から南東方向へ延びており、南西側の端は調査区外になる。本村・溝狭間遺跡第1次調査の際に、北側道路西端と南側道路で確認された溝状遺構、第2次調査時に発見された溝状遺構と同一である可能性が高い。SD03の平面形状を第4図に、断面形状を第6図に示す。今回確認された溝状遺構の中で最も緩やかに下降する形状をしている。調査時に確認された規模は、長さ24m以上、幅11m以上、残存する深さは8区で約40cm、4・7区で約20cmである。第1次調査・第5次調査で確認された分も含めると、平面形状は不整形な箇所があり、北西に向かって流れる長さ約75m以上で幅約20mの大規模な自然流路であった可能性がある。SD03は、黒褐色砂まじり粘土もしくは黒褐色粘土層が堆積する。その下位は灰黄褐色の粘土層もしくはシルト質土層であり、鉄分・マンガンを含み、鉄分の沈着は縦に筋状になっている。下層のシルト質土層からは湧水が確認された。

図示できる遺物はないが、7区で器表面が摩耗した土器の細片が出土しており、時期は土器片の胎土から縄文時代晩期～弥生時代前期の可能性が高い。出土遺物が摩耗した土器細片のみであることから、後世に流れ込んだものである可能性が高い。

SD03の時期の詳細は不明であるが、遺物の時期の縄文時代晩期～弥生時代前期より後世と思われる。今回の調査では、他の遺構との切り合いは見られなかったが、本村・溝狭間遺跡第1次調査の際には別の溝状遺構に切られる箇所が確認されている。このため、SD03はその溝状遺構より以前に存在していた流路であると思われる。

4号溝状遺構 (SD04) : (第4図・第6図)

SD04は調査域北側5区の北東端に位置する。不手際で表土除去時に認識できていなかったため、掘り下げ過ぎてしまい、調査区北壁と東壁の土層で確認できたに止まる。北西から南東に向かって延びるが、東隣の6区では確認されなかったため、5-6区間を通るか、6区付近で大きく蛇行している可能性がある。SD04の推定の平面形状を第4図に、断面形状を第6図に示す。SD04は粘土もしくは砂混じりの粘土層が堆積しており、その下位は砂礫層が重層的に堆積しており、湧水を確認した。この下位の砂礫層は南から北へ下降している。北側隣接地は当該地より低くなっており、北へ向かって下降する地形である。確認された土層と周辺地形から、SD04は北側の低地に流れ込む自然流路である可能性が高い。長さは2m以上、幅は1m以上であったと思われる。残存する深さは約60cmである。

遺物の出土がなくSD04の時期の詳細は不明であるが、砂礫層の上面に堆積していることから、粘土層もしくは砂混じり粘土層の上に堆積するSD01・02以前に存在した可能性がある。

5号溝状遺構 (SD05) : (第4図)

SD05は調査域南東2区に位置する。北東から南西に向かって延びており、複数の支流に枝分かれする。SD05の平面形状を第4図に示す。黄褐色混砂粘土層の下位に暗褐色粘土が堆積しており、どちらもマンガンの沈着が見られる。平面形状が不整形であることから、自然流路である可能性が高い。北端と南端がSD02に切られる。長さ6m以上、幅2.4m、残存する深さは約15～50cmであり、北東側が浅く南側が深くなっている。

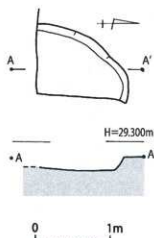
遺物は確認されなかったため詳細な時期は不明であるが、SD05はSD02に切られることから、SD02より以前に存在した流路である可能性が高い。

土坑 (SK)

調査城南東に位置する2・3・9区で合わせて5基の土坑を確認した。どの土坑からも遺物の出土は無く、時期特定や土坑の性格の把握は困難である。以下に概要を示す。

2区1号土坑 (2区SK01) : (第8図)

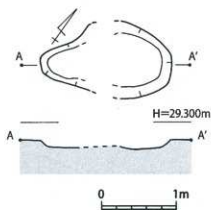
2区SK01は2区の南東隅に位置する。東側・南側は調査区外へと続く。もとの平面形は不明であるが、楕円もしくは円形であったと思われる。長さは1.2 m以上、幅は1 m以上である。残存する深さは約40cmである。埋土については所見の不備があったが、写真で確認すると灰褐色である。遺物の出土はなく時期は不明である。



第8図 本村・溝狭間遺跡6次調査2区SK01実測図 (S=1/50)

3区1号土坑 (3区SK01) : (第9図)

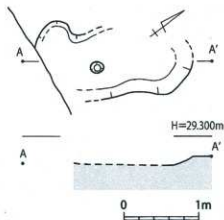
3区SK01は3区の南西に位置する。平面形は楕円形である。長さ1.7 m、幅1 m、残存する深さは約10cmである。埋土は褐灰色粘土である。遺物の出土はなく時期は不明である。



第9図 本村・溝狭間遺跡6次調査3区SK01実測図 (S=1/50)

3区2号土坑 (3区SK02) : (第10図)

3区SK02は3区の南端に位置する。遺構検出時には平面での認識ができなかったため、トレンチを掘り下げたところの断面で確認できた。平面形は楕円形である。長さ2 m以上、幅1 m、残存する深さは約15cmである。埋土は褐灰色粘土である。遺物の出土はなく時期は不明であるが、3区P03に切られるため、このピットより前に存在したと思われる。



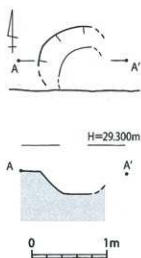
第10図 本村・溝狭間遺跡6次調査3区SK02実測図 (S=1/50)

9区1号土坑 (9区SK01) : (第11図)

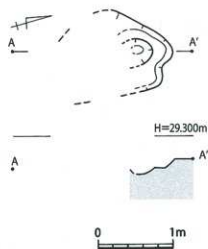
9区SK01は9区の南端に位置する。SD02を切る。平面形は円形である。長さは0.8 m以上、幅0.8 m、残存する深さは約30cmである。埋土は黄灰色粘土で、鉄分を含む。遺物の出土はなく時期は不明であるが、SD02より後世に掘られている。

9区2号土坑 (9区SK02) : (第12図)

9区SK02は9区の南端に位置する。SD02を切る。平面形は楕円形である。長さ1.5 m以上、幅1.2 m、残存する深さは約20cmである。埋土は褐灰色粘土で、鉄分とマンガンを少量含む。遺物の出土はなく時期は不明であるがSD02より後世に掘られている。



第11図 本村・溝狭間遺跡6次調査
9区 SK01 実測図 (S = 1/50)



第12図 本村・溝狭間遺跡6次調査
9区 SK02 実測図 (S = 1/50)

ビット (P)

調査城南半部の1・2・3・9区で合計46基のビットを確認した。ビットの平面形状は第4図に示している。出土遺物のほとんどは細片であり、図示できなかったが、図示できたものは第13図に示した。以下、各区で発見されたビットについて概要を示す。

1区検出のビット：(第4図)

1区では調査区西側で15基のビットを確認した。数基のビットは近現代の攪乱を受け、残存していない箇所がある。調査時の所見では、1区ビットの埋土と7区SD03の埋土が同じであるとしており、1区西端の遺構検出面は西へ緩やかに下がっていることから、ビットとSD03の一部を混同している恐れがある。ビットの径は約15～60cmで、残存する深さは約10～15cmである。他調査区検出のビットに比べて残存する深さが浅い。ビットの性格は不明である。3基のビットから土器片が出土したが、細片のため図示できない。すべて器表面が摩耗している細片であり、後世に入り込んだ可能性が高い。土器片の胎土から弥生土器と土師器があると思われる。

2区検出のビット：(第4図)

2区では5基のビットを確認した。すべてのビットがSD05の南東に位置する。径は約20～30cmで、残存する深さは約8～55cmである。出土遺物はなく時期やビットの性格は不明である。調査時の所見によると、埋土は黒褐色と灰褐色の2種類に分けられ、灰褐色の埋土はSD02の埋土に似ているとあるため、埋土が灰褐色のビットは、SD02に近い時期に存在した可能性がある。

3区検出のビット：(第4図・第13図)

3区では10基のビットを確認した。ビットはほぼ3区の南西に位置する。径は約20～130cmで残存する深さは約20～40cmである。6基のビットから土器片が出土している。多くが図示できない土師器の細片である。P04で土師器の坏もしくは小皿の破片、P05で土師器の坏の口縁部と鉢の胴部、P06で鉢の口縁部が出土している。ビットの性格は不明である。

以下、特徴があるビットについて説明する。

P01

P01は3区の西端に位置する。不手際により平面記録作成前に、土層確認用のトレンチを掘削してしまった。土層で確認したところ、幅は1.3 m以上、残存する深さは約30cmである。埋土は暗灰黄色粘土層である。

出土遺物を第13図に示す。3は土師器で鉢形の煮沸具で内外面にナデを施す。外面胴部下半部に段がつく。図示したもの以外にも土師器の破片が出土しており、鉢形の煮沸具であるが、内面にハケ目を施すため別個体の可能性が高い。時期は中世と思われる。

P03

P03は3区の南端に位置する。不手際により平面記録作成前に、土層確認用のトレンチを掘削してしまった。埋土は黄褐色粘土層で焼土と炭が混じる。土層の観察結果によるとSK02を切る。遺物は図示できない細片が出土している。胎土と焼成から土師器片であると思われ、時期は中世であると思われる。SK02を切るため、SK02より後の時期になるとと思われる。

9区検出のピット：（第4図・第13図）

9区では16基のピットを確認した。ピットは9区SD02の東側に点在している。ピットの径は約20～70cmで、残存する深さは約10～65cmである。調査時の所見によると、埋土は黒褐色・灰褐色・褐色の3種類があるが、時期差等によるものかは不明である。ピットの性格は不明である。

出土遺物を第13図に示す。2は9区P02から出土した土師器の坏で、底部糸切りである。器表面がやや摩耗している。時期は13世紀～14世紀に属すると思われる。上記以外にも、図示できない土器片が出土している。

その他出土遺物（第13図）

遺構外から出土した遺物について説明する。

1は9区表土から出土した青磁の椀で、底部片である。内外面に施釉され、底部外面は露胎である。胎土は灰色で白色粒を含む。底部外面は赤味を帯びている。時期は13世紀～14世紀に属すると思われる。



第13図 本村・溝狭間遺跡6次調査その他出土遺物実測図（S=1/4）

(3) 本村・溝狭間遺跡6次調査の総括

以上、本村・溝狭間遺跡第6次調査に関し報告し、以下では調査内容の要点を述べる。

a: 調査の経緯

本村・溝狭間遺跡第6次調査地は八女市本村字溝狭間に所在し、調査地は当初、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、宅地造成時の試掘・確認調査で埋蔵文化財が発見され、平成31年に域内道路部分、令和2年に個人住宅建設箇所の数ヶ所で調査を実施した。今回の発掘調査の契機は、民間開発による9棟の建売住宅建設が計画されたことである。このため建物建設予定範囲について発掘調査による記録保存を実施した。

b: 周辺地形

本村・溝狭間遺跡の北側・西側は低地帯となっており、調査地は東から延びる微高地上の北西端に位置していたと思われる。報告内容の通り調査では、調査地北側で北へ向かって下降する流路、西側で南東から北西に延びる流路が発見されたことから、調査地の北側・西側が低い地形であったと思われる。

c: 調査の成果

調査の結果、溝状遺構5条、土坑5基、ピット46基が発見された。遺構の多くは地表下約1mの黄褐色粘土層もしくは黄褐色砂混じり粘土層の上面から掘り込まれていた。

土層の観察結果から遺構の時期は、SD04が最も古く、SD03・05、SD01・02の順であることが判明している。SD04は、北側の低地に向かって流れ込む自然流路である。SD03は、南東から北西に向かって延びる大規模な自然流路であり、SD05は、北東から南西に枝分かれしながら延びる不整形な自然流路である。

今回の調査の検出遺構のうち、特筆する点について述べる。SD01・SD02は調査地の南東部に掘られる溝跡である。SD01は1・8区を縦断する溝跡であり、SD02の西側に隣接する。SD02は2・3・9区にまたがって存在し、2・9区で東側へほぼ直角に曲がる方形区画溝である。SD01も本村・溝狭間遺跡第1次調査時の成果を合わせると、方形の区画溝であった可能性がある。埋土の類似や出土遺物から、SD01・SD02は同時期に存在したと思われる、隣接する位置関係から、二重の方形区画溝であった可能性があり、もしくは分岐して掘られた大規模な同一の溝であった可能性がある。SD02が囲む区画内には土坑5基とピット31基が存在する。今回の調査で最も遺構が集中する箇所である。これは、調査地の北側・西側が低地であり、調査地が集落の北西端に位置していたためと思われる。

出土遺物のうち注目したい点は、SD02から越州窯系の青磁出土したことである（第7図14、図版4-7）。この青磁は碗の底部で高台が付き、内面見込みに花文を彫る。土師器の環や鉢形煮沸具などの中世に属する遺物が多数出土している中で、古代に属する越州窯系の青磁が出土していたため、後世の流れ込みではあるが、調査地周辺に古代の遺跡が存在していた証拠のひとつとなる。

d: 本村・狭間遺跡集落の様相と今後の課題

以上、今回の発掘調査では狭小な9区画の調査ではあるが、中世の集落の一部に伴う遺構を発見した。調査地は集落の北西端に位置し、付近の自然流路から水を引いた区画溝が利用されたと思わ

第1表 本村・溝狭間遺跡6次調査出土遺物観察表

発掘番号	出土地点	埋蔵層	出土品	色澤 (色、V)	調整	寸法 (cm)			備考 (状況、保存等)	地層番号	
						17径	高さ	底径			
第5図	1	8区 S D 0 1	石製品 石臼?	—	焼灰	—	長さ 21.0	高さ 8.4 (13.6)	重さ: 1.99kg 1面を使用。	R19	
第5図	2	2区 S D 0 1	石製品 磨石?	—	灰白	—	長さ 10.3	高さ 4.6 (7.7)	重さ: 270g 1面を使用。	R18	
第7図	1	2区 S D 0 2	土師器 鉢	1mm以下の細砂を含む。 石炭・炭石・赤色粒	浅黄褐色/ 浅黄褐色	外面: 回転ナデ。糸切り 内面: 回転ナデ	10.7	7.1	2.5	軟質。ほぼ完全。糸切り感。	R 1
第7図	2	3区 S D 0 2	土師器 小皿	1mm以下の石炭・炭石を含む。 黒色粒を少量含む。	浅黄褐色/ 浅黄褐色	外面: 回転ナデ。糸切り 内面: 回転ナデ	—	(6.2)	(0.95)	軟質。底部1/2。糸切り感。	R14
第7図	3	9区 S D 0 2	土師器 鉢	2mm以下の細砂を含む。 石炭・炭石・黄褐色	灰黄/灰黄	内外面: 調整不明	—	—	(3.8)	軟質。口縁部小片。	R8
第7図	4	2区 S D 0 2	灰土器 鉢	調整。1mm以下の石炭・石炭を含む。	焼灰/焼灰	内外面: ナデ	—	—	(5.1)	軟質。口縁部小片。	R11
第7図	5	2区 S D 0 2	土師器 鉢	2mm以下の細砂を多く含む。 石炭・炭石	焼灰/灰白 に少し濁	外面: ナデ。筋ナデ 内面: ハケナ	—	—	(5.8)	軟質。口縁部小片。	R2
第7図	6	3区 S D 0 2	土師器 鉢	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	焼灰/灰白	外面: ナデ。突縁部付後ナデ 内面: ハケナ	—	—	(7.4)	軟質。底部小片。 文様あり。	R12
第7図	7	3区 S D 0 2	土師器 鉢	2mm以下の細砂を含む。 炭石・石炭	灰/に少し濁	内外面: ナデ	—	—	(5.5)	軟質。胴へ底部小片。	R3
第7図	8	3区 S D 0 2	土師器 鉢	1.5mm以下の石炭・赤色粒を含む。	浅黄褐色/ 浅黄褐色	内外面: 調整不明	—	—	(2.7)	軟質。片断。	R13
第7図	9	9区 S D 0 2	土師器 高杯	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	浅黄褐色/ 浅黄褐色	外面: 不明 内面: 筋ナデ	—	—	(6.4)	軟質。磨面片。	R0
第7図	10	9区 S D 0 2	土師器 高杯	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰/灰	外面: 筋ナデタタキ 内面: 平行タタキ。同心円タタキ。 ハケナ	—	—	(8.0)	硬質。小片。	R9
第7図	11	9区 S D 0 2	土師器 高杯	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰/灰	外面: 筋ナデタタキ 内面: 平行タタキ。同心円タタキ。 ハケナ	—	—	(8.7)	硬質。小片。	R7
第7図	12	9区 S D 0 2	土師器 高杯	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰白/灰白	外面: 回転ナデ後筋物 内面: 回転ナデ後筋物	(10.0)	—	(1.7)	硬質。口縁部1/8	R16
第7図	13	3区 S D 0 2	土師器 鉢	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰白/灰白	外面: 回転ナデ後筋物 内面: 回転ナデ後筋物	—	—	(2.55)	硬質。底部下平小片。	R15
第7図	14	9区 S D 0 2	土師器 高杯	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰白/灰白	外面: 回転ナデ後筋物 内面: 筋ナデ後筋物	—	—	(2.5)	硬質。底部1/2 内面足跡に付文を認む。	R10
第13図	1	9区 P 0 2	土師器 高杯	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰白/灰白	外面: 筋ナデ後筋物 内面: 筋ナデ後筋物	—	—	(7.0)	硬質。底部1/3	R17
第13図	2	9区 P 0 2	土師器 高杯	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰白/灰白	外面: 回転ナデ。糸切り 内面: 回転ナデ	(11.3)	(7.1)	2.4	軟質。ほぼ完全。糸切り感。	R4
第13図	3	3区 P 0 1	土師器 鉢	調整。1mm以下の石炭・炭石を含む。	灰白/灰白	外面: 筋ナデ 内面: ナデ	(44.4)	—	(17.6)	軟質。口縁部小片。	R5

れる。遺構は調査地内の南東に集中し、本村・溝狭間遺跡の1～5次調査の成果からも、宅地内では南東側に遺構が集中する傾向が見える。このため、集落域は調査地の東側と南側に展開していた可能性が高く、今後の調査事例の増加により集落の様相がより明らかとなることが期待され、今後の課題である。

本調査地も含め調査地周辺は、近年では後継者問題等により徐々に水田の宅地化が進んでいる。今回報告した本村・溝狭間遺跡周辺の特に東側・南側にも、重要な遺構・遺物が埋蔵されている可能性が高いため、今後も開発に際しては細心の注意が必要である。

版 圖



(1) 本村・溝狭間遺跡第6次調査全景（南側上空より）



(2) 1区半掘状況（北西より）



(3) 1区SD01完掘状況（北西より）



(4) 1区SD01南壁土層（北西より）



(5) 2区全景（北東より）



(1) 2区 SD02 (東より)



(2) 2区 SD02 南壁土層 (北より)



(3) 3区 SD02 (南東より)



(4) 3区 SK01 (北東より)



(5) 3区 SD02 西壁土層 (東より)



(6) 4区全景 (南東より)



(7) 5区全景 (北東より)



(8) 5区北壁土層 (南西より)

図版 3



(1) 6区全景 (南東より)



(2) 6区西壁土層 (南東より)



(3) 7区全景 (南より)



(4) 8区全景 (南東より)



(5) 8区SD01北壁土層 (南より)



(6) 8区西壁土層 (東より)



(7) 8区SD01 (南より)



(1) 9区全景 (南西より)



(2) 9区 SD02 北壁土層 (南より)



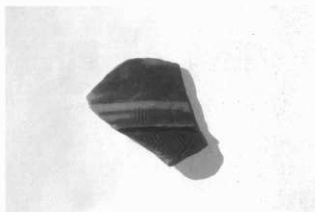
(3) 8区 SD01 出土遺物 第5図1



(4) 8区 SD01 出土遺物 第5図2



(5) 2区 SD02 出土遺物 第7図1

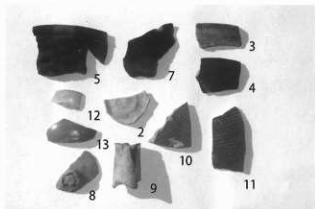


(6) 3区 SD02 出土遺物 第7図6

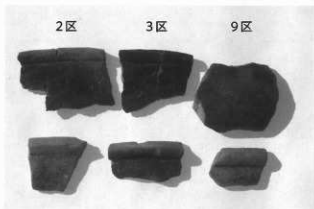


(7) 9区 SD02 出土遺物 第7図14

図版 5



(1) SD02 出土遺物 第7図



(2) SD02 出土遺物



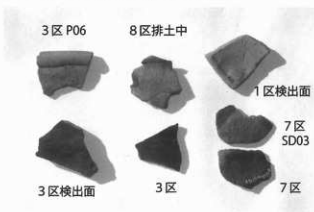
(3) 9区表土出土遺物 第13図1



(4) 9区P02 出土遺物 第13図2



(5) 3区P01 出土遺物 第13図3 他



(6) その他出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もとむら・みぞはざまいせきだい6じちょうさ							
書 名	本村・清狭間遺跡第6次調査							
副 書 名	福岡県八女市本村所在遺跡の発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ号	第137集							
編 著 者 名	甲斐 郁（かい ふみ）							
編 集 機 関	八女市教育委員会							
所 在 地	〒834-8585 福岡県八女市本町647 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331							
発行年月日	西暦 2022（令和4）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとむら・みぞはざまいせき 本村・清狭間遺跡 第6次調査 （本村遺跡群）	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 もとむらみぞはざまいせき 本村字清狭間	402109	405003	33° 13' 11"	130° 33' 25"	20210106 ～ 20210312	約 500 m ²	建売住宅建設
所収遺跡	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
本村・清狭間遺跡 第6次調査 （本村遺跡群）	集 落 跡	中世		溝状遺構5条 土坑5基 ピット46基		土師器・須恵器・陶磁器 石器		
要 約	民間開発の建売住宅建設に伴い発掘調査を実施した、本村・清狭間遺跡第6次調査に関する報告である。 調査は狭小な9区画の範囲で行い、中世の集落の一部に伴う溝跡、土坑、ピットを発見した。遺構の中でも、特筆すべきであるのが、調査域南東に位置する S001・S002 であり、方形区画溝である可能性が高い。S002 に囲まれた区画内は今回の調査で最も遺構が集中する箇所であり、これまでの調査成果からも、遺跡が所在する宅地内の南東に遺構の集結が見られる。調査地は周辺地形から、集落の北西端に位置していたと思われる、集落は調査地の東側・南側に展開していた可能性が高い。							

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

本村・溝狭間遺跡第6次調査

八女市文化財調査報告書

第137集

令和4年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (株)東兄弟
八女市折樽院563